報告Ⅳ：「大谷探検隊収集のソグド語文献」

報告者：吉田　豊（京都大学文学研究科教授）

入澤：　では続けて、今度はソグド語に関しまして、京都大学の吉田先生からご報告です。よろしくお願いいたします。

吉田：　今ご紹介に与りました吉田です。私の発表は大谷探検隊収集のソグド語の資料についてということですけれど、ここは仏教学関係の方が多いことですから、特に仏典に特化した発表にいたしました。お手元にハンドアウトがあると思います。1 ページから 8 ページまでありますが、最初の 4 ページがここでの話の内容の要約で残りは資料です。それでは最初に写真を幾つか見ていただきまして、さきほどの橘堂先生のお話から頭を切り替えていただこうと思います。

最初に申し上げておきますが、ここでお話しするような文書が書かれた時代にはソグド文字もウイグル文字と同様に縦書きされていました。ただ、我々研究者は大体横で読んでいるものですから、写真を示す時はしばしば横書きであるような示し方をしてありますがその点はご容赦ください。ここにお見せするのは大谷探検隊将来の仏典の断片です。大谷資料のソグド語文書にはこういう小さな断片しかありません。

その次ですが、これはそれらの中で同定ができた『法王経』です。次にこれもやはり同定できたものですけど、貝葉本の裏表で『大乗涅槃経』です。その次は、これは同定しようがありませんが、仏典の末尾に添えられたいわゆる回向文です。これらはどれも小さい断片ですがどれも仏典でして、こういうものの数を数えて何点というふうに言っているわけですから、数から受ける印象と実情はかなり違うと思います。それから次、これは今橘堂先生のお話にもあったトヨクという場所から出土した断片で、ベルリンにあるものです。断片ですが、非常に丁寧に書かれております。漢文の仏典とその発音をソグド文字で表記してあるものです。こういうものは普段は皆さんあんまりご覧にならないと思いますので、今日はこの資料についての話も後でしたいと思います。それから最後の１点ですが、これも非常に珍しいもので挿絵が付いているソグド語仏典です。この裏にもソグド語テキストがありますし、この絵の傍にもソグド語が書いてあります。絵のほうは明らかに中国絵画とは違います。こういう絵画の伝統を持つ文化を背景とするような仏教も、ソグド人は信仰していたということが分かるかと思います。

これからはお手元のハンドアウトを使いながら話をいたします。今まではハ

ンドアウトの０（ゼロ）、「大谷コレクションのなかのソグド語仏典の姿」というのを見ていただきました。見ていただいた小さい断片はみなトルファン盆地出土でありまして、高昌故城やトヨクなどで見つかったのだと思います。高昌故城やトヨクの位置は 8 ページ目に地図を付けておきましたのでご覧ください。

大谷資料の中でイラン系の言語の資料は、コータン語を除きますと 400 点ほどあります。そのうちの 100 点はマニ文字で書かれたマニ教文献です。残り 300 点ほどはソグド文字で書かれておりますが、その中で確実に仏典と言えるものは 40 点ほどです。仏典のリストを付録として 2 ページの終りから 3 ページ、4 ページにかけて付けておきました。これらは、先ほどお話もありました百濟先生、ベルリンのズンダーマン先生、それから私が共同で研究し 1997 年に発表した本にあるものです。ですから、この番号などはこの本にあるものから取っております。大谷探検隊の資料は量が少なくて、世界中にあるソグド語の仏典の中で言えば、大体 100 分の 1 ぐらいかと思います。そういう意味では、ここの資料というのは、全体の中で僅かなものですけど、ソグド語仏典のヴァリエーションを知る上では重要な資料になると思います。

文書が書かれた時代ですが、紙質等からだいたい 8 世紀から 10 世紀ぐらいのものだろうと考えております。それから内容ですが、例えば今見ていただいているものは、片面がソグド語で、その裏面がソグド文字ないしはウイグル文字で書いた漢文の仏典です。つまり中国語の仏典の発音をソグド文字で表記した文献です。残念ながら漢文の仏典は原典を比定できませんし、表のソグド語訳された仏典の方の原典も分かりません。何が書いてあるのだろうと興味を持たれた方は、5 ページにこの部分のテキストと私の訳を挙げておきましたからご覧下さい。この頃は『大正大蔵経』の電子テキストが利用できますから、うまくいけばこういう私の訳からでも原典を比定できるかもしれません。残念ながら 1997 年の段階では、それはできませんでした。

それからその次のスライドですが、これは私が最初に同定できたものです。3 断片あるわけですけれど、互いに接合はできません。禅宗の人たちが好んで読んでいた偽経の『法王経』の断片でした。

それと次、これが先ほど言いましたように、漢文の『大乗涅槃経』のソグド語訳です。これと同じ写本の離れは、ベルリンに膨大な数がありまして、百濟先生とベルリンのズンダーマン先生が共同で研究されるはずでありました。大谷資料を研究する中で、その同じ写本の離れがここにも 3 断片あることがわかりました。今のところ対応場所が特定できるのはこの比較的に大きな断片だけでした。これについても、ハンドアウトの 7 ページに原典の対応箇所を示しておきました。それから先ほどの『法王経』についても、ハンドアウトの 6 ページに関連する資料を添えておきました。

そういうわけで、残念ながら大谷資料の中の仏典というものはそんなに数が

あるわけではなくて、あまり多くのことが分かるわけではありません。ちなみに、先ほど橘堂先生も言っておられました旅順博物館にある資料はどうかと言いますと、私が調べました限りソグド語仏典は1点もありませんでした。こんな調子で，大谷探検隊将来の資料のなかのソグド語仏典についての話はこれで終わりです。ただそれではあまりにつまらないと思いますので、次にソグド語の仏典一般、或いはソグド仏教というのはどのような仏教かについて説明いたしまして、大雑把な知識を得ていただきたいと思います。

ソグド仏教については、ずいぶん前に羽溪了諦先生が『西域之仏教』という本を1914年に出版し、そこの「康居国の仏教」という部分でかなり詳しく論じておられます。この本に書かれていたことというのは、かなり多くの人達、とりわけ年配の先生方の常識と言いますか、伝統的な理解になっているのではないかと思います。羽溪先生は2世紀、或いは3世紀といった非常に古い段階でソグド地方に仏教が伝わって、そこで仏典の翻訳も行われたというようなことを書いておられます。もちろん、何の根拠も無くそんなことを言っておられたわけではないわけですが、その後の我々の研究で、実際にはそういう事態はあり得ないということが判明しております。

ハンドアウトの2ページですが、「3　ソグド地方の発掘とソグド語仏典の研究から分かること」という部分について説明します。ソグド地方というのは、先ほどの8ページの地図で示しておきましたが、サマルカンドを中心とする地域で、今のウズベキスタン、タジキスタンにあたるところです。考古学者たちはこの辺りを発掘していますが、組織的な仏教遺跡は見つかっていません。そういう意味で、ソグド地方で仏教が大々的に伝わったという証拠は見つかりません。たしかにソグド語で訳された仏典はありますが、それは我々が知る限り、全て漢訳仏典からの重訳であります。従いまして、ソグド語で訳された仏典というものは、全てコロニアルな現象と言いましょうか、仏教圏に移住してきたソグド人達がその地の仏教を受容した結果であると考えざるを得ないと思います。現在まで知られているところでは大半は漢文仏典に依存しています。しかしながら、特にトルファンなどでは、当地で行われておりました北道のいわゆる説一切有部の仏教の影響を受けたらしい仏典も見つかります。先ほどお見せした写真の最後、中国風とはほど遠い様式の絵の入った仏典などは、おそらくそういうものだろうと思います。残念ながら、あの仏典はまだ原典が分かっておりません。

次にハンドアウトの4番目、「どんなソグド語仏典があるか」ということについてお話ししたいと思います。そこにも書きましたように、大概は漢訳の大乗経典からの翻訳です。なかには『法王経』や『善悪因果経』のような偽経の翻訳もありますが、いずれにしても漢文仏典からの翻訳です。それから、僅かに梵語、トカラ語からの翻訳もあると考えられます。ハンドアウトにもあげておきまし

たように最近は、ソグド語の仏典についてまとまった解説もありますので、そういうものを参考にしていただければ良いかと思います。

次にハンドアウトの「５　今後の課題」ですが、これは何はともあれこういう未比定の仏典をこつこつ比定していくということに尽きます。最近は『大正大蔵経』の電子テキストが簡単に利用でき検索も容易ですから、昔なら絶対無理だと思われたような小さな断片でも原典を特定できる場合があります。私も最近、敦煌でみつかったソグド語仏典の一つですが、『六十華厳』の断片であると特定することができました。それからトルファン出土の資料の中には，『宝聚経（Ratnarāśī-sūtra）』の断片があるということも分かってきました。これらとは別に、これはまだ全く手つかずですが、北道の説一切有部とソグド語仏典の関係を究明しなければなりません。また非常に重要なことですが、我々が持っているソグド語仏典と漢文の歴史文献や出土文書に出てくるソグド人の仏教徒との関係も研究しなければなりません。そんな中国にいたソグド人仏教徒には有名な僧侶もいました。いわゆるソグド系の学僧達です。例えば、華厳宗の第三祖である法蔵は 7 世紀から 8 世紀にかけての人ですが、よく知られているように明らかにソグド人の子孫です。そういう人達と我々が持っているソグド語仏典にどんな関係があったかというようなことも、追求しなければならない重要なテーマです。

それと、もう一つ注目すべきことですが、今のキルギスタン、イシク・クルの西側、チュー川の流域には、比較的に大規模な仏教遺跡があります。ここは玄奘が通過したにも拘らず一切報告していませんから、玄奘以降に建てられた仏教遺跡と見なされます。仏教寺院の跡が数個あるわけですけど、そこからは仏教信仰を示すものが出土しています。ここはソグド語圏でしたから、信者の中にソグド語を話す人がいた可能性は高いと言えます。こういう場所の仏教信仰がどんなものであったかということも見ていく必要もあります。土壌が乾燥していないので、出土するものの数は多くありませんが、梵語の仏典などもみつかっているようでして，今後の発掘から目を離せません。

さて、これで私がお知らせしたいことはだいたい説明し終りました。ハンドアウトではその後に、カタログと言いましょうか、大谷資料にはどんなソグド語仏典があるかを示すリストがあります。詳しくは、先ほど紹介しました本で見て下さい。

最後に、時間のある限りちょっと珍しい仏典について紹介しておきたいと思います。最初はこれ、So 14830 です。これについてはハンドアウトの 4 ページを見てください。これはベルリンにあるものでして、トヨク出土という古い書き込みがありましたから、トヨクで発見された文書だと考えられます。ここには漢字の発音をソグド文字で表記してありますから、漢字音の研究には非常に重要な資料でありまして、そのテーマについては私自身が 1994 年に専論を発表

しました。しかしソグド人の仏教信仰における位置づけ、つまり仏教史学的な研究が残されています。この文書にある漢文のテキストと、最初の 1 行目だけですがソグド文字で書かれた漢字の発音をハンドアウトには引用しておきました。この文書の特徴は、最初にソグド文字を縦書きし、それを書いてから個々の発音に対応する漢字を添えていることです。ですから、漢字の行も左から右に進みます。漢文には『大乗起信論』からの引用がありますが、その引用の前の 2 行ほどはこれには対応するテキストが見つかっていません。つまり、『大正大蔵経』の電子テキストで検索する限りヒットしません。こういう中国語というか漢文の、しかも経典ですらないものの発音を記すということにどんな意味があったのかまだよく分かりません。ただ仏典の中国語の発音を勉強していたソグド人の仏教僧侶がいた、しかもトルファンにいたということが、この文献から確認できるわけであります。ただここにあるようなテキストの内容だけでなく、その発音までも学習するソグド人僧侶の信仰或いは教学的な背景がどんなものであったのか、私は残念ながら仏教学者ではありませんので、全く想像もつきません。ただ仏教学の専門家の人たちにこういう資料を紹介して、何かご意見をいただければ幸いだと考えています。

それからこれが最後の写真です。先ほども言いましたように、ソグド語の仏典は概ね中国仏教に依存していますが、そうでない仏典も確実に存在しています。その中の一つは、アラネーミ・ジャータカです。このジャータカはトカラ語やウイグル語、それからイラン系のトゥムシュク語といった北道の言語に翻訳されたものがありまして、北道で流行した仏典であったことが推測されます。そのソグド語訳は非常に奇妙な写本でして、貝葉本ではありますが、どの貝葉も片面は極彩色の絵、もう一方の面はテキストという構成になっています。そしてその絵は中国風ではありません。今見ていただいているのはその写本とは違うものですが、やはり西域風の絵が描かれています。この裏面にはソグド語が書いてあり、仏典であることはあきらかです。残念ながらこれもまだ原典が分かっておりません。冒頭でも申しましたように、これは中国仏教とは全くことなる文化的な伝統を持つソグド語仏典があったということを示唆しています。その歴史的な背景の究明も今後の課題で、詳しく研究していかなければならないと思っています。雑駁ですがこれで私の報告を終わります。

入澤：　どうも吉田先生、ありがとうございました。